

中学校家庭科における生活福祉教育の授業実践

— 高齢者との交流を通して —

多々納道子・三島香子*・立石綾子**

Michiko TATANO, Yoshiko MISHIMA and Ayako TATEISHI
A practical Study on Welfare Education in Junior
High School Home Economics Subject
-on exchange with the elderly-

[keywords : welfare education 生活福祉教育, aging society 高齢化社会,
views on welfare and the elderly 福祉・高齢者観]

I. はじめに

高齢化が急激に進んでいる我が国では、家族の生活において、高齢者問題はさけて通ることのできないものであり、その解決には家庭科の関わるころが大である。

ところで、今日の高齢化は、平均寿命の伸長によるものだけでなく、出生率の低下を大きな要因として進行してきている。その背景には、核家族化や家族の小規模化等の家族の構造的変化がある¹⁾。

このような状況の中で、人間が人間らしく育ち、自己や他者を理解するには人間同士の関わり合いが重要であるにも関わらず、子ども達の高齢者との接触や交流機会は減少してきている²⁾。したがって、学校教育や社会教育の中で高齢者との交流の場を設けたり、高齢化や高齢社会について取り上げることが大きな意義を持つものである³⁾。

しかし、高齢者に関する学習は体系化されておらず、模索の段階にある。そこで、中学校家庭科の家庭生活領域の家族の生活の中に、高齢者と家族・地域社会という小単元を設け、高齢者や高齢者を取りまく問題を正しく理解し、家族や自分の生活について考えさせるため、高齢者と交流を図り、高齢者問題を考える内容を設定した。教材開発および学習方法を併せて検討するため、授業研究を行ったので報告する。

II. 授業の実践

- 1 対象：島根大学教育学部附属中学校1年の2組
男子20人、女子20人の計40人。なお、各組は男女を半
数ずつに分けた構成になっている。
- 2 授業日時：1995年6月6日～6月28日
- 3 授業者：三島香子
- 4 授業計画：単元名—高齢者と家族・地域社会
(1) 家庭のはたらき、高齢者と家族……………2時間
(2) 特別養護老人ホーム訪問……………2時間
(3) 高齢者を支える家族と地域社会のあり方…1時間

計 5時間

5 授業方法

高齢者と家族・地域社会の小単元の授業方法として、家族の中の高齢者を考えるという内容に関しては、1組はアニメをビデオで視聴し、もう1組はドラマを演ずることによってすすめた。続いて2組とも特別養護老人ホームを訪問し、施設の見学と高齢者との交流を図った。高齢者を支える家族と地域社会のあり方については、講義形式による同じ方法で進めた。

6 事前調査

授業前に生徒の家族状況、老人ホームへの関心、高齢者観などを調査し、授業計画を立てるための参考資料にした。

(1) 家族状況

まず、家族構成についてみると、核家族と拡大家族との比率は6対4で、核家族の方が多いという全国的傾向とほぼ同じであった。

次に、祖父母との同居経験は、「現在一緒に住んでいる」ものが30.0%、「過去と一緒に住んでいた」が15.5%、「これまで一緒に住んだことがない」のが55.5%であり、半数以上の生徒にはこれまで祖父母との同居経験がないことが明らかとなった。このような家族状況からみて、生徒は日常的に高齢者と交流する機会が極めて少ないことが推察できる。

(2) 老人ホームへの関心

老人ホームへの関心を明らかにするため、老人ホームの見学経験とボランティア活動の有無および老人ホームの高齢者との交流意欲の3点について尋ねた。

結果を表1に示すように、老人ホームの見学とボランティア活動については、大部分のものに経験がなかった。老人ホームの高齢者との交流意欲は、「ある」ものと

表1. 老人ホームへの関心

(%)

	ある	なし	どちらでもない
見学	25.0	75.0	
ボランティア活動	10.0	90.0	
高齢者との交流への意欲	45.0	10.0	45.0

「どちらでもない」ものとの割合は半々になっており、見学や活動経験の少ない割には、意欲を示すものが多いといえる。

(3) 家庭の機能の理解

生徒が家庭生活において高齢者や病人といった、身体的・精神的に保護が必要な家族をどのように受けとめているかを明らかにするため、まず家庭のはたらきで重要だと思うことについて尋ねた。結果は表2に示す通りで

表2. 家庭のはたらきで重要だと思うこと

(%)

子どもを生き育てる	52.5
寝たり休んだりする	52.5
夫婦がいっしょにくらす	62.5
くらしに必要なものがある	55.0
くらしに必要なお金がある	60.0
子どもをよい人間に育てる	72.5
その家の習慣を受けついでいく	30.0
高齢者や病人などが守られる	67.5
家族のみんなが楽しく過ごす	87.5
近所の人や友達とつきあう	62.5
その他	0
無答	2.5

ある。

生徒が家庭の機能として理解しているものを全体的にみると、「家族のみんなが楽しく過ごす」というのが87.5%で最も多く、次で「子どもをよい人間に育てる」が72.5%、「高齢者や病人などが守られる」の67.5%であった。これら上位にあげられている3つは、いずれも家族の人間関係を基礎として、慰安、教育や保護といった機能を示すもので、生徒は家庭のはたらきとして、人とのつながりに関わる面を重視していることが理解できる。

本調査結果は、日本家庭科教育学会での調査結果¹⁾と比較して、高齢者や病人は家庭で守られるものと考えているものが約2倍というように多くなっている。家族関係において伝統的な考え方が強いという地域性を反映しているものと考えられる。その他の項目についても「その家の習慣を受けついでいく」を除いて、いずれも50～60%の値を示しており、家庭には人間関係を中心として多面的な機能があるということを理解しているといえる。

以上のような生徒の実態から判断して、高齢者を理解するにはまず、高齢者との交流の機会を持つことが第一であると考え、特別養護老人ホームうぐいす苑とケアハウスはなうみ苑を訪問し、施設の見学およびうぐいす苑に入所している高齢者との交流を図る授業内容を組み入れた。

7 資料

(1) ビデオ組

ビデオ組は、アニメ「ふしぎ森の仲間たち」(財団法人長寿社会センター制作)を使用した。

(内容の概要)

・主人公のジャンプ(モモンガ)は、お父さんとお母さんと3人暮らし、おばあちゃんはおじいちゃんと2人暮らしである。ある日、おばあちゃんが木から落下して足を骨折した。

・ジャンプの家族は、病院から退院したおばあちゃんと一緒に過ごすことになったが、おばあちゃんの介護で家族みんなの疲れが日ごとにたまり、おばあちゃんもしいにふさぎ込んでいった。

・役場の保健課からホームヘルパーのおばさんたちがやって来て、おばあちゃんをお風呂に入れてくれる。ヘルパーの助けもあって、徐々に回復していくおばあちゃん。デイサービスセンター訓練室でリハビリ訓練を行えるようになる……というように、おばあちゃんの介護を通して、家族の協力と支えについて考えさせるとともに、医療機関や福祉施設のサービスなど、高齢者を支える社会の仕組みを紹介したものである。

(2) ドラマ組

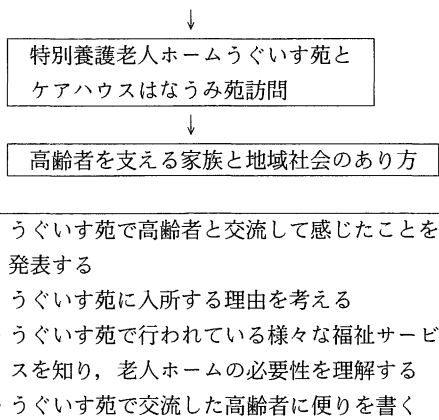
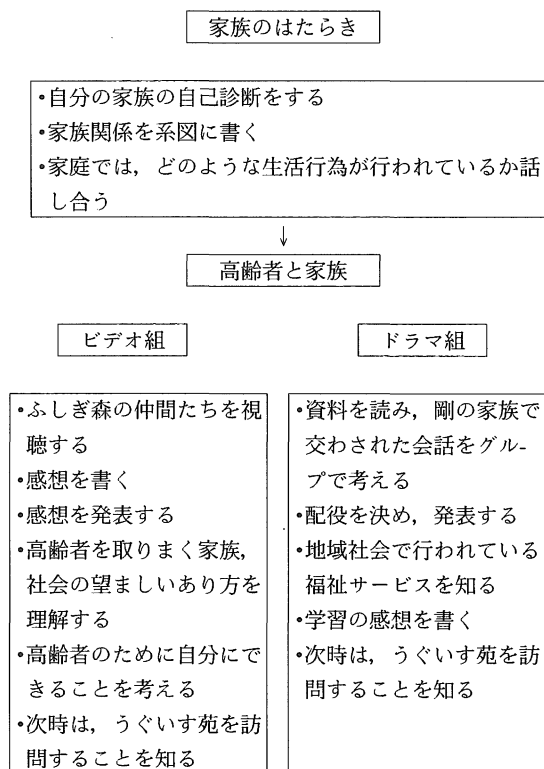
ドラマの組は、「ふしぎ森の仲間たち」のストーリーをもとに作成した資料を読み、おばあちゃんの介護に疲れた主人公剛の母親が熱を出して倒れた後、「この後、剛の家族がどんな会話をしたのか考えてみましょう。」と問題提起した。生徒は5人グループの班に分かれて、家族でどのような話し合いがもたれたのか考えて、シナリオを作成し、それに基づいてロールプレイングによるドラマを演じた。高齢者を支える各種のサービスには触れていない。

8 授業の目標と流れ

(1) 授業の目標

- 1) 家族とは何か、自分は家族の一員として、どのように関わって行くべきかを理解し、実践することができる。
- 2) 高齢者とその家族の両方の気持ちを実感し、どのようにしたらお互いが気持ちよく過ごせるかを考え、実践することができる。
- 3) 地域社会で行われている高齢者を支えるサービスの種類と内容を知り、高齢者の介護の具体的方法には、種々の選択肢があることを理解する。

(2) 授業の流れ



Ⅲ. 結果および考察

1 アニメ「ふしぎ森の仲間たち」を視聴した感想（ビデオ組）

生徒が「ふしぎ森の仲間たち」を視聴した感想の一部を記す。

- ・ジャンプ君は小さいにおばあちゃんのお世話や家の手伝いをしてすごくえらいと思った。家族で協力しあうのがやっぱり大切だと思う。(女子)
- ・本当におばあちゃんががで、お母さんが病気になったら困ると思う。でも今は、お年寄りを助けるのもあり楽になったと思う。(女子)
- ・ぼくもいつかは年をとって高齢者になるのだから、その時に家族の人やお世話をする人にいたわってもらえるように、高齢者の気持ちを考えて、いろいろお世話したいです。(男子)
- ・この松江市もあのような年をとった人達にたいするあんなの（ホームヘルパー制度）は、あるのかないのが気になる。(男子)
- ・私たちは“ふくし”のことをもっとするべきだと思います。(女子)
- ・家族の調子が悪いとわずらわしいこともあるだろうけど、自分たちにできることを自分たちできちんとすれば、少しは病気の人でも安心してゆっくと休んで早くよくなることができると思う。(女子)
- ・ホームヘルパーさんがいる中で、私は他の世界から見ているような感じだから、進んでその世界に入りたいです。(女子)
- ・老人ホームでお世話する人は、お年寄りのお世話をしたら喜ぶので、その顔が見たくて仕事をやっていると思う。(男子)

これらの感想から、高齢者問題についての生徒の考え

方が読みとれるので、全員の感想に5つの観点を与え、考え方を分析した。5つの観点とそれぞれの割合は、次の通りである。

(1)高齢者の気持ちや、高齢者が抱える問題について(高齢者理解)……30.0%

(2)介護の必要な高齢者を支える家族の気持ちや、家族が抱える問題について(家族の一員としての問題意識)……80.0%

(3)高齢者を支える社会の仕組みや、社会が抱える問題について(社会の一員としての問題意識)……80.0%

(4)自分の老いについて考えたことについて(自分の老後意識)……20.0%

(5)自分の家族に介護の必要な高齢者がいた時の自分の行動について(問題解決能力)……25.0%

これらの分析結果から、ふしぎ森の仲間たちのビデオ視聴を通して、多くの生徒は高齢者を支える家族や社会の望ましいあり方やそれらの抱える問題について理解し、高齢者問題に関して思考が深められたといえる。しかし、高齢者自身の気持ちやここで取り上げられているような問題が実際に自分にふりかかった時の気持ちや行動については、あまり見当がつかなかったといえる。

2 ドラマのシナリオ

5人ずつの4班に分け、それぞれの班がドラマのシナリオを作成し、ロールプレイングによって演じた。各班の生徒の取り組みを示す。主な登場人物は、主人公の剛(中学1年)、剛の父母と祖父母の5人である。

4つの班のシナリオの概略およびシナリオに表れた高齢者問題についての生徒の考え方について述べる。

まず1班は、家族の会話が祖母の世話に困り果てた内容であり、それを聞いた祖母が物陰で悲しむという展開である。剛は何をしたらよいかわからず悩むが、父親が家族に頑張るように励まし、祖母がそれを聞いて喜ぶというところで終わる。この班の生徒は、家族だけによる高齢者の介護にはかなり負担が生じることを表現し、その裏返しとして、介護を必要とする高齢者は家族に迷惑をかけることをすまないと思うという気持ちを表している。また、剛の言動が明確に表現されていないことから、このような問題が実際に起こった時、自分はどうか対処したらよいか判断しかねるという状態を反映していると考えられる。

2班のストーリーにおいては、剛が介護に耐えられなくて祖母を老人ホームに預けること提案するという点を特徴としている。父親はそんな剛をしかるが、母親は剛の気持ちを理解している。結局、祖母は自分から老人ホームに入ることを決意する。このように、介護が必要になっ

た事態に対して、高齢者を抱えた家族がどうしたらよいのか、迷う姿が表現されている。また、剛の祖母に対する態度から判断して、一見介護することを拒否しているともみなされるかもしれない。しかし、高齢者の介護において家庭以外の社会福祉施設を利用するという考え方が取り入れられており、広い視野から介護のあり方を考えようとしている点が評価できる。

3班は、主な登場人物の他に医者が登場する。父親に頼まれて医者を呼んでくるのが剛である。祖母は医者に入院することを勧められるが、「さみしいですから」と断る。3班の生徒は、剛が自分たちと同じ中学校1年生であることから、母親が介護に疲れた時、自分たちに何ができるかを積極的に考え、高齢者の気持ちを理解しようとしていることを示している。

4班は、剛が家事の分担を拒否し、家族に協力するよう説得されるが納得できないという、展開になっている。4班の生徒は、剛のことを自分のこととして受けとめているが、「ぼくばかりいやだよ」というセリフから、高齢者を取りまく問題が自分にふりかかった時、拒否する態度を示している。家族が助け合うことの重要性には気づいているものの、このような問題において、自分たちのような中学1年生にも果たすべき役割があることを、十分に認識できていないものと考えられる。

次に、4つの班のシナリオに関して、ビデオ組の感想文の内容分析に使用した5つの観点を与え、シナリオに表れた生徒の考え方の分析を試みた。

その結果、高齢者理解、家族の一員としての問題意識および問題解決能力を示すセリフは、どの班にも書かれていた。逆に、社会の一員としての問題意識と自分の老後意識については、どの班にも述べられてなかった。

これらのことから、生徒たちは今回の資料である「剛の家族」を通して、高齢者とその家族の気持ちやそれらが抱える問題について考えることができ、また家族に介護の必要な高齢者がいたときの自分は、どのような行動をとったらよいかというようなことを考えることを可能にした。しかし、自分自身の老いやこの時点までの授業では触れなかった社会的な福祉サービスについては、当然のことながら考えるのが困難であったようである。

これらのドラマの内容から、生徒は高齢者とその家族の気持ちやそれらが抱える問題について考えることができ、もし自分の家族に介護の必要な高齢者がいるとすれば、自分や家族が何を考え、どのように行動するとよいか、その解決には、従来のように家庭で介護するというだけでなく、種々の選択肢があるということを理解できたものと思われる。

ビデオ組とドラマ組を比較・検討すると、ビデオ組では資料の中に高齢者を支える社会的サービスが紹介してあったので、社会の一員としての問題意識を持つことができたことを多くの生徒が記述していた。しかし、ビデオ組ではジャンプやジャンプのおばあちゃんの立場になって考えことを、20～30%の生徒が記述していたに過ぎなかった。これに対して、ドラマ組では社会福祉サービスについては触れてなかったの、困った時にサービスを利用しようと考えたのは、2つの班に過ぎなかった。逆に、ドラマ組はシナリオを考え、演じるということで高齢者や剛の気持ちや態度について考えることができ、問題解決の具体案の提案を可能にしたことが明らかである。

3 特別養護老人ホームを訪問しての感想

特別養護老人ホームを訪問しての感想の一部を記す。

・いろいろなお世話をすることはむずかしくてできないけれど、お話をして交流することはできます。(男子)

・孫がきたような感じで、ぼくたちがきんちょうして話せない中、進んで質問したり、話しかけてくれて、ぼくもとても楽しかったです。お年寄りの方々も毎年このようなことをしてあげると心の励みにもなり、毎年来るのを楽しみにして、長く生きられると思いました。(男子)

・高齢者の方は「ぼけている、一人じゃ何もできない」などのあまりよいイメージじゃなかったけれど、実際交流してみると、明るくてとてもはっきりしているように感じました。(男子)

・松江にも老人ホームがあるなんて知らなかった。最初はもっとさびしい所かなと思ったけれど、設備も整っていて中もすごくきれいだった。「なるほど、ここは住みやすいな」と思った。寮母さんも親切な人ばかりでした。(女子)

・施設内の方々、本当に楽しそうな顔をしている人も、とても悲しそうにしている人もいました。ぼくが一緒に話したおばあさんはとても悲しい顔をしていました。働いている女の人が「楽しいですか」と聞いたら、女の人が行ってしまってから、「悲しい」とぼそっと言いました。ぼくはその時、どきっとしました。やはりそのように感じている方もおられるのです。ぼくはいつかは老人ホームがなくなってほしいです。もっと別のかたちで、老人のお世話ができればと思います。ぼくは自分があそこに入ったら、多分ぼくもさみしいと思います。身内のものが会いに行けば状況も変わると思います。ぼくはさみしいまま一生を終えたくはないと思います。(男子)

・カラオケで楽しく歌って、おばあさん、おじいさんの楽しそうな顔がいっぱいあり、自分でも楽しくなってきました。最後におばあさんと握手して、とてもあたたか

い感じがしました。また行ってみたいと思いました。(男子)

・中には100歳なのに手芸をされたりする方もおられ、わたしも100まで生きてみたいと思いました。(女子)

・実際うぐいす苑で交流してみてもびっくりしました。からおけ(歌)が好きだったからです。話をしてみてもわたしの知らないことがけっこうありました。またこういうことをして、もっと高齢者の方を知りたいと思いました。(女子)

これらの感想から、生徒は老人ホームを訪問して、何に一番強い印象を持ったのかが理解できるので、次のような5つの観点を設け分析を試みた。

- (1) 高齢者と気持ちよく交流できたかどうか
- (2) 老人ホームで生活する高齢者のイメージ
- (3) 交流した高齢者の様子
- (4) 老人ホームの施設・設備
- (5) 今後の交流やボランティア活動の意欲

その結果、高齢者と気持ちよく交流できたかについては、70%の生徒が記述していた。生徒の大部分は、交流前には高齢者との交流に不安を抱いていたが、実際には最初から積極的に交流できたというものが42.9%であった。初めは緊張してなかなか話ができなかったが、高齢者から話しかけてもらったり、職員や引率教員に話のきっかけをつくってもらってから気持ちよく交流できた、と述べたものは38.1%であった。結局、最後まで親しくなることができなかったと述べたものは、19.0%であった。したがって、全体の80%以上は高齢者とスムーズに交流できたことになるが、約20%は交流することが苦痛だったようなので、交流の方法を含めて事前学習について検討することが今後の課題となる。

老人ホームで生活する高齢者のイメージについては、70.0%が記述しており、交流前と実際に交流してからではイメージが大きく変わったというものが多かった。すなわち、うぐいす苑には身体の不自由な高齢者が多く、家族と離れて生活していることもあって、表情が暗い高齢者がいる。しかし、多くの高齢者が元氣よく歌ったり、苑内展示物から趣味を楽しんでいる姿などを実際に見ることによって、これまでの「弱い」、「保守的」、「遅い」などの固定的な高齢者のイメージ^{5) 6)}から、新しいイメージでとらえたものが76.2%であった。マイナスのイメージを持ったものは23.8%に過ぎなかった。生徒は高齢者の実際の姿に接し、交流することの効果表れているものと考えられる。

その他、交流した高齢者の様子は63.3%、訪問した老人ホームの施設・設備は13.3%、今後の交流やボランテ

イア活動への意欲は33.3%の生徒が記述していた。

今回の授業で生徒は特別養護老人ホームを訪問し、施設の見学と高齢者との交流を行ったが、施設や施設に入所している高齢者の実態を理解するとともに、特に高齢者との交流から、約1/3の生徒が、自分たちができることに気づき、今後さらにボランティア活動をするなどの交流を深めたいという意欲を喚起できた。

4 高齢者への便り

生徒が特別養護老人ホームで交流した高齢者にあてた便りから、さらに高齢者との交流をどのようにとらえたかを検討するため、便りの内容をまとめると次のようになる。

- (1)健康への気づかいや長寿を願う気持ち……80.0%
- (2)老人ホームでの交流についての礼や思い出……71.4%
- (3)再会への願い……42.9%
- (4)高齢者の現状を尋ねる内容や生活の様子を想像した内容……31.4%
- (5)生徒の近況報告……22.9%

交流した高齢者の健康への気遣いや長寿を願う気持ちを最も多くの生徒が記述しており、自分たちよりも何倍もの年月を生きてきた高齢者との交流を通して、相手を敬い、健康に気をつけてもっと長生きしてほしいという強い気持ちをもったことが明らかである。

これらに対し、自分の近況を伝えたり、相手の状況を尋ねたものは少ない。これは、会ったのが今回初めてであり、交流の時間もわずか1時間だけであったこと、これが最初の便りということで、相手の状況を十分に把握できなかったということによるものと思われる。

高齢者が施設で生活していると、どうしても外部との接触が少なくなる。今後、手紙のやりとりなどの交流を続けることによって、施設の生活に社会の新しい風を吹き込むことができ、それは高齢者にとっても生徒たちにとっても、意義あるものとなる。

「またうかがいます」、「またいつか、うぐいす苑に行けたら会いたいです」、「お返事まっています」と今後の交流の継続に意欲をみせているものが半数近くおり、実際に交流することが、さらに交流したいという意欲を高めたものと考えられる。

女子高校生と老人ホームの高齢者との交流が共に支え、共に生きる社会を築く能力を養うのに有効であることが明らかにされているが⁷⁾、本研究により、中学生においても同様であることがわかった。

5 高齢者観の変化

高齢者との交流を通して生徒の高齢者についてのとら

え方がどのように変化したか、授業前と授業後の高齢者観の違いを比較・検討をした。

高齢者についての15のイメージや考え方を選び、高齢者観を測定する尺度とした。高齢者観を測定する各項目について、「非常に思う」(5点)、「やや思う」(4点)、「どちらでもない」(3点)、「あまり思わない」(2点)、「全く思わない」(1点)の5段階評定尺度により得点化した。結果は図1に示される通りである。

高齢者観を示す項目の得点をみると、授業前と授業後において、「高齢者は伝統や文化を伝える貴重な存在である」、「子どもが高齢になった親の面倒をみるのは当然である」、「家族は、高齢者と家事を分担したり、精神的・金銭的に支えあうべきである」、「高齢者は、生きがいを持って積極的に活動をする方がよい」についてはともに高得点になっており、高齢者の存在を高く評価し、扶養に関しても肯定的にとらえていた。また、「今後、高齢者が多くなると、自分の生活によく影響を与える」と「高齢になると、すべての能力がおとろえてしまう」については得点が低く、否定的である。これらのことを考え合わせると、中学1年生の高齢者観の特徴は、高齢者のよさを積極的に認め、家庭で保護するのがよいと考えていることにある。しかし、自分が「将来、どんなことがあっても自分が両親の面倒をみたい」というのは、若干低くなっている。現在の段階では、明確ではないようである。

授業後において大きく変化した項目の中で、「高齢になっても、自分の身の回りのことは自分でしたい」と「高齢者は、社会の中で保護される必要がある」については高得点となり、このような考え方を強く支持するようになった。また、「高齢者の世話は、家庭で祖母や母などの女の人がした方がよい」は、逆に得点が低くなり、女性だけの役割ではないという理解が進んだものと考えられる。これら3項目の授業前と授業後の得点には、t検定により5%あるいは1%水準で有意差があり、高齢者との交流を通して、高齢者理解を促す授業の学習効果が認められた。

6 学習意欲

高齢者と家族・地域社会の小單元についての生徒たちの学習意欲がどうであったかを、明らかにした。学習意欲については、学習題材への興味……おもしろいと感じる面、学習内容と方法の理解……よくわかると感じる面、学習仲間への所属性……役に立ち、認められたと感じる面の3つの観点から調査した⁸⁾。

結果は表3に示したように、学習題材への興味および学習内容と方法の理解に関する項目は、「はい」と答え

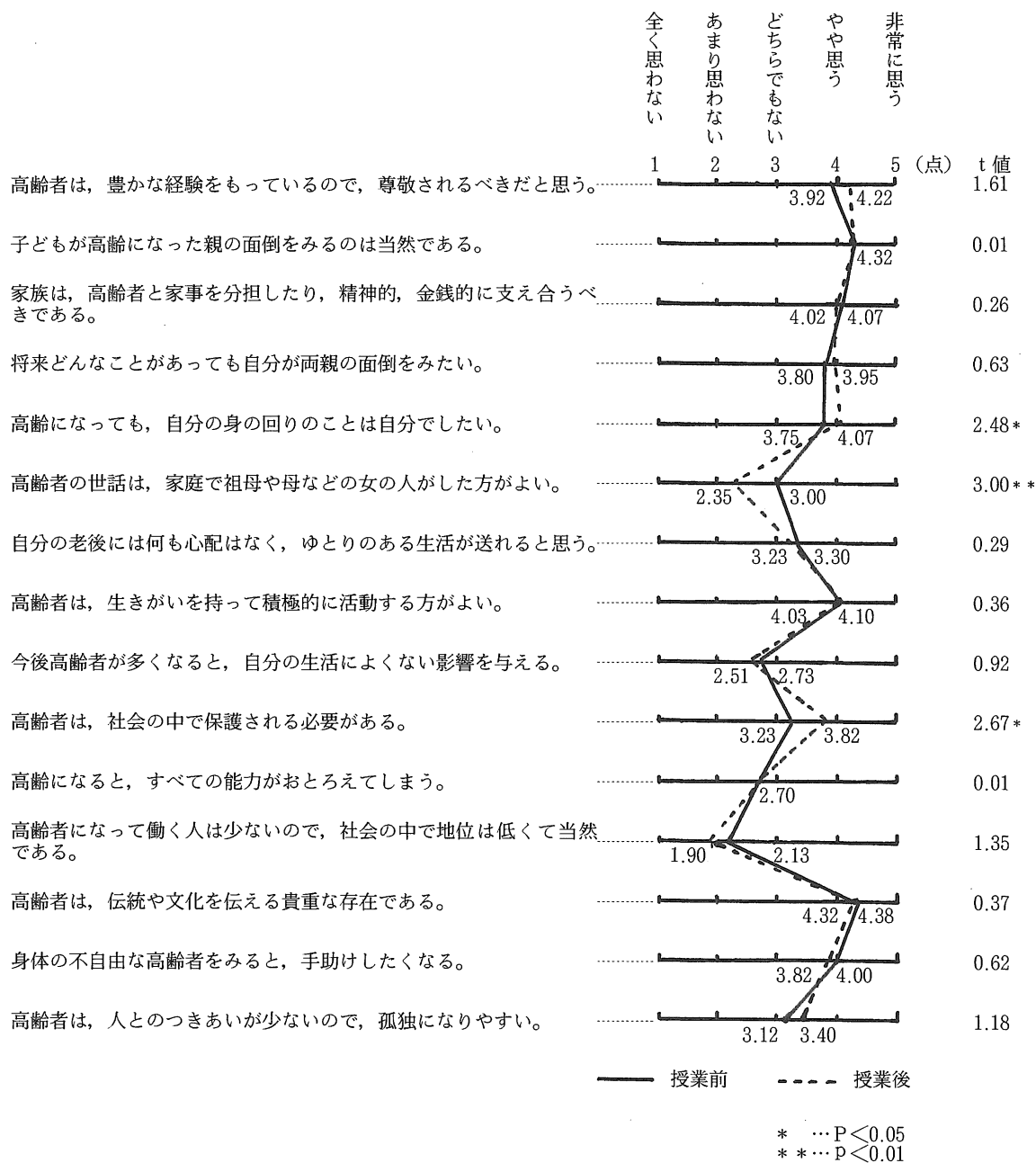


図 1. 授業前と授業後の高齢者観の変化

たものの方が多く、ロールプレイングのクラスはいずれの項目も95.0%と極めて高い値を示した。特に、学習題材への興味に関する2つの項目については、 χ^2 検定によって5%水準で有意差がみられた。

また、学習仲間への所属性という点では、「授業中のあなたの発表や活動がクラス友達の役に立つよう努力したと思いますか」について、ドラマ組は「はい」と答えたものが65.0%とかなり高くなっており、ビデオ組との

表3. 学習意欲

	ビデオ組		ドラマ組		χ^2 値
	はい	いいえ	はい	いいえ	
家庭のはたらき、高齢者と家族・地域社会について、学習したことは楽しかったですか。	70.0	25.0	95.0	5.0	21.6*
家庭のはたらき、高齢者と家族・地域社会のような学習をもっとやりたいですか。	65.0	30.0	95.0	5.0	21.6*
家庭のはたらき、高齢者と家族・地域社会について学習したことは、よくわかりましたか。	90.0	10.0	95.0	5.0	1.2
授業中のあなたの活動が、クラスの友達に役立つよ努力したと思いますか。	30.0	70.0	65.0	35.0	23.3***
授業中の他の人の発表が、あなたの役に立ったと思いますか。	85.0	10.0	90.0	87.5	0.1

*…… $P < 0.05$ **…… $P < 0.01$

間に χ^2 検定によって1%水準で有意差があった。「授業中の他の人の発表や活動が、あなたの役に立ったと思いますか」に「はい」と答えたものの割合を重ねて考えると、学習仲間への所属性という点からも今回の小單元における学習意欲は高く、特にロールプレイングによってドラマを演じたことは、学習意欲を高めるのに有効であったといえる。

両組においてこのような違いがみられたことについて、ドラマの組は、授業展開において自分たちで物語を構成していくおもしろさや、自分たちで考えた展開をクラスの友達に理解してもらおうように演じることを体験することがあったためと考えられる。これに対して、ビデオ組ではアニメをみるという受け身の姿勢での学習となり、自発的に発言や学習をするということになりにくかったものと思われる

7 今後やってみたい活動

今後の授業内容に関連する活動への意欲を調査し、それらの活動を今後やってみたいと答えたものの割合は表4の通りである。

「高齢者に教えてもらって何かをつくる、郷土料理、民芸品など」と「福祉施設を見学する」については、両

組とも高く、しかも差異のない割合となっている。これに対して、「ビデオや映画などをみる」はビデオ組が高く、逆に「福祉施設でのボランティア活動に参加する」、「本や資料をみる」、「クラスで話し合う」および「何かテーマを決め、自分たちで調査する」の主体的な学習活動はドラマ組が高くなっている。受けた授業が受動的であれば、今後やってみたい授業も受動的であるというように、受けた授業と今後やってみたい授業は関連があることがうかがえた。

IV まとめ

特別養護老人ホームの訪問において、大多数の生徒は高齢者とうまく交流でき、高齢者についてよいイメージを持つことができた。また、中学生なりの問題意識を持ち、今後さらにボランティア活動をするなどによって、交流を深めたいという意欲を持つことができ、高齢者理解に効果があったといえる。学習方法は、ロールプレイングによってドラマを演じた方が、学習題材への興味や学習仲間への所属性を高めるという面で有効であった。

表4. 今後やってみたい活動

	ビデオ組	ドラマ組	χ^2 値
高齢者に教えてもらって何かをつくる、強度料理、民芸品など	80.0	75.0	** 23.4
福祉施設を見学する	60.0	60.0	
福祉施設でのボランティア活動に参加する	30.0	55.0	
ビデオや映画をみる	60.0	45.0	
本や資料をみる	20.0	45.0	
クラスで話し合う	20.0	40.0	
何かテーマを決め、自分たちで調査する	50.0	75.0	
その他	5.0	5.0	

(複数回答)

* * * * * $P < 0.01$

参考文献

- 1) 大谷憲司：『現代日本出生力分析』，関西大学出版部，pp.124～125，(1993)
- 2) 荒井紀子，神川康子，渡辺彩子：「児童・生徒の福祉観とその背景要因（第1報）－生活活動の実態と高齢者観との関連－」，日本家庭科教育学会誌，第39巻1号，p.3，(1996)
- 3) 渡辺彩子，荒井紀子，神川康子：「児童・生徒の福祉観とその背景要因（第2報）－生活活動の実態と学習意欲との関連」，日本家庭科教育学会誌，第39巻1号，p.13，(1996)，
- 4) 日本家庭科教育学会：『児童・生徒の発達と家庭科教育(1)現代の子どもたちは家庭生活をどう見ているか』，家政教育社，pp.62～71，(1984)
- 5) 佐藤泰道，長嶋紀一：「老化イメージ(4)大学生による老人のイメージ」，浴風会調査研究紀要，p.73，(1976)
- 6) 保坂久美子，袖井孝子：「大学生の老人観」，老年社会科学，vol.8，pp.106～110，(1986)
- 7) 橋下京子，『おじいちゃん，おばあちゃんお元気ですか～女子高校生と老人ホームのお年寄りとの交流～』，大修館書店，pp.259～261 (1994)
- 8) 片岡徳雄，黒部市桜井中学校：『小集団による授業改造』，黎明書房，pp.23～27，(1973)

資料

学習指導案

特別養護老人ホーム訪問

目標

- 1 特別養護老人ホームとケアハウスを見学し、施設・設備や職員の方の高齢者に対する配慮を理解することができる。
- 2 高齢者と交流し、高齢者の気持ちや考えを知ろうとすることができる。

展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	資 料
<p>1. 本時の課題を知る。</p> <p>2. 特別養護老人ホーム「うぐいす苑」とケアハウス「はなうみ苑」を見学する。</p> <p>○浴室 ○部屋 ○食堂 ○トイレなど</p> <p>3. 職員の説明を聞く。</p> <p>○「はなうみ苑」の入居条件 ○「うぐいす苑」の入所方法 ○料金 ○運営の基本方針 ○在宅福祉サービス ・ショートステイ ・託老事業 ・ホームケア促進事業 ・入浴サービス など</p> <p>4. 苑内喫茶で高齢者と交流する。</p> <p>○茶菓を飲食しながらの会話 ○歌、レクリエーション</p> <p>5. 学習のまとめをする。 ○本時の感想を用紙に記入する。</p>	<p>○ 特別養護老人ホームとケアハウスを見学したり、高齢者と交流したりすることを知らせる。</p> <p>○ 「うぐいす苑」と「はなうみ苑」の施設・設備の違いに気づかせる。</p> <p>○ 各設備の高齢者に対する配慮に着目させる。</p> <p>○ パンフレットを見ながら話を聞かせ必要があればメモをとらせる。</p> <p>○ 疑問な点は質問をするよう促す。</p> <p>○ 自己紹介をすると共に相手の氏名を聞かせ、後の交流に生かさせる。</p> <p>○ テーブルを巡視し、積極的に交流するよう指導する。</p>	<p>はなうみ苑、 うぐいす苑の パンフレット</p> <p>利用料早見表</p> <p>在宅福祉サービスのプリント</p>